

医療倫理の視点から生と死を考える

『看病用心鈔』を中心に

鶴見大学仏教文化研究所所員 関根 透

一、まず、自分の体験から

平成二十四年六月九日（土）の公開シンポジウムにおいて、パワーポイントを用いて鎌倉時代のビハラの指南書といわれる然阿良忠上人の『看病用心鈔』を題材に、現在の医療倫理観を念頭に置いて説明した。

私は平成六年九月二十六日に当時鶴見大学歯学部先生の結婚式に招待されて、式が開始される直前に心筋梗塞に見舞われ、タクシーで最も近い東京女子医大病院に緊急入院した。若い三人の先生が突然に心電図に釘付けになり、式服のままストレッチャーに載せられ手術室に運ばれた。私自身もただ事でないことに気づき、やはり父親が心筋梗塞で急死した時を想い出した。三日後CCUを出る時に、当時の病院長の優しい細田嵯一先生が「これからのあなたの命を補償します」といった言葉が強く印象に残っている。その後、生と死が紙一重であることを実感し、死の不安と心の悩みが続いた。「朝起きると、今日も目が開いた」と想い、今日一日を大切にしようと考えた。死を直前にしてこそ生の貴重さが実感できたと思う。以後、神から贈られた自分の命を大切にしようと考えようになった。

現在、東京女子医科大学や横浜市立大学医学部で死の問題を含めて「医療倫理」の講義をしている。死の問題について真剣に考えたのは、あの死を直前にした時であり、生の大切さを医学部の学生に今も説いている。かつて私は死を前向きには捉えようとしなかったので、医学系の学生には他人である患者の心を気づかい真摯に生と対峙して欲しいと教育している。現在では、日常に追われ、あの時の人生の危機を忘れてしまった感があるが、今でも自分の命を「神からのプレゼント」として大切にしようにしている。

二、死を前向き説いた書物

退院後、死を前向きに捉えている本を読み、印象に残った書物を紹介したいと思う。

まず、ビートたけし著の『死ぬための生き方』はビートたけしさんが平成六年にバイク事故で九死に一生を得たときの心境を病床で語った本である。死の準備教育の必要性を説いているが、病床では「死のことだけを考えていた」と述懐している。私もたけしさんと同じように死のことを考えていたので、この本を感動をもって読んだことを思い出す。

永六輔さんの『大往生』も死を前向きに捉えたユニークな書物である。タブー視されている死がユーモアを交えて書かれている。「何か言い残すことはありませんか。自分でご臨終ですといつて亡くなった」とか、「七十歳を過ぎたら医者の扱いが可笑しい。死んだって文句のいえない歳だもの」などである。

水上勉さんの『骨董の話』は、彼が天安門事件の直後に帰国しようとしたが帰れず、北京で心筋梗塞になり、やつと羽田空港に着いた。そこから救急車で病院に直行した時の話から始まっている。彼の心臓は三分の二が壊死してしまい、死を見つめつつ骨董作りを始めた。「集中治療室の思い出」は私自身が体験したことを思い出させ書物なので、あの時のことを思いつつ読んだ記憶がある。

最後に、Aデーケン先生の『ユーモアは老いと死の妙薬』も題名のように死を前向きに説いた面白い本である。そこにはデーケン先生自身が大腸がんと闘う病院生活、入院中の患者の心理、医師や看護師との対応の困難さがユーモアを交えて語られ、死を前向きに描いている。人生の危機から安らかな死を迎えるための準備教育の必要性も説いている。また、キュブラー・ロスの『死ぬ瞬間』の著作も臨死者の心理をよく著わした含蓄のある名著である。

三、医師国家試験から最近の死に関する医療倫理教育を考える

医師国家試験におけるターミナルケアの問題にキュブラー・ロスの『死ぬ瞬間』が選択肢を含め数回出題されている。この『死ぬ瞬間』は現在のターミナルケア教育に影響を与えた書物としてよく紹介されている。

その内容は告知された臨死者がショックの体験から死を受容するまでの五段階の反応経過を説明したもので、示唆

に富んだ内容である。まず、死が近いことを告知された患者は①厳しい事態を打ち消そうとする拒否の態度が見られる。②すべてに怒りを示す態度に変わり、③回復への生命延長の願いを求めるようになり、取引をする態度になる。更に④喪失の悲しみから抑うつ状態に進み、⑤遂に、事態の重大さを自覚して死を受容する段階に至る、という。そこには死の受容を周囲の人々が如何に援助できるかを真剣に考えさせる記述が沢山掲載されている。かつて内村鑑三に師事し、清廉で善意に満ちたキリスト者・八木重吉の『秋の瞳』や『貧しき信徒』には、この『死ぬ瞬間』と同じような死の受容経過が見られる。また、柳田邦男氏の西川喜作氏をモデルにした『死の序章』も『死ぬ瞬間』と同様な死の反応経過が示されている。

なお、医師国家試験では具体的に次のような問題が出題されている。

スライドで示した問題は「死にゆく人の心の動きを五段階で表し、ターミナルケアの在り方に影響を与えた『死ぬ瞬間』の著者はだれか。a マザー・テレサ、b ウィリアム・オスラー、c ヘレン・ケラー、d シュバイツァー、e キュブラー・ロス」という問題である。他にも、選択肢の中で『死ぬ瞬間』の書名やキュブラー・ロスの名前が出題されている。また、ターミナルケアの問題では、「ターミナルケアについて正しいのはどれか。a 患者の延命治療を最優先させる。b スキンシップは避ける。c 患者のQOLを重視する。d 疼痛の緩和は死期を早めるのではない。e 死についての話はしない。」であるが、臨死者を思いやる心や患者の人権や家族を尊重する倫理的な問題が問われている場合が多いようである。

四、『看病用心鈔』が示す看取りの医療倫理

さて、私の発表の中心は『看病用心鈔』が示す先人のターミナルケアについての叡智である。

かつて多くの日本人は平生「死について」考えることはしなかった。それは解決不可能な不知の問題であるから、タブー視していた。しかし、死は必ず自分が引き受けなければならない事態であることも知っているのだ、現在の日本人は死を前向きに考えるようになった。だが、現実には核家族の生活であり、肉親の死に立ち会うことが少なくなっ

ている。多くの日本人が病院で死を迎えており、生と死が生活から分離されているように感じられる。そこで、死を前向きに捉えた先人の叡智として『看病用心鈔』を紹介したいと思う。『看病用心鈔』には看取る者と看取られる者の知恵が説かれている。それは、私たち現代人にも有益な先人の叡智であり、時代を超えて通用すると思われる遺産でもある。特に、鎌倉時代は現在に酷似していて「錯綜の時代」とか「混沌の時代」と呼ばれているので、現代の終末期医療にも有効な叡智になると思う。

『看病用心鈔』とは、鎌倉光明寺の開山・然阿良忠上人（一一九〇—一二八七）が一二四〇年頃に著したとされるターミナルケアの書物（二巻）である。しかし、『看病用心鈔』を良忠上人が著したとされる証拠はないが、先人の鷲尾教導氏や鈴木成元氏や伊藤真徹氏らの研究によって、著者は「然阿良忠上人」とであると推測している。その構成方法は「前書き」、「一九九条の条文」、「後書き」の三部構成になっている。内容は仏教の立場からの看取りの方法が説かれている。特色として『往生要集』や『臨終正念訣』を基に鎌倉時代の臨終の看取り作法が具体的に述べられている書物である。

現在三種の『看病用心鈔』の写本が残されているが、多少その趣を異にしている。まず、安土・浄厳院に保存されている『看病用心鈔』は表紙が藍で染められており、内部も黄檗で染められているため、虫食いもなく、保存状態が大変良好な写本である。漢字と平仮名で記載されている。この写本は応永二〇年（一四一三）に隆暁が筆写してものである。巻末の書誌的な事項には、「此用心書案悟真寺上人作也云々」とあり、隆暁が推測するのに悟真寺を創設した然阿良忠上人が著したものであると記されている。第二の写本は京都・常楽寺に保存されている『看病用心鈔』で、正応三年（一二九一）に存覚上人によって筆写されたものである。破損や汚れた部分が多く、漢字と片仮名で記されている。そこには「鎌倉上人御作 私云然阿弥陀仏良忠也」と書かれており、存覚上人は「鎌倉上人を然阿良忠上人」と解釈している。第三の写本は横浜・金沢文庫所蔵の『看病用心鈔』である。昭和二十八年に金沢文庫長の熊原政男氏が原稿用紙にペンで写された写本で、漢字と平仮名で示されている。この写本の原本は東京大崎・専修寺のものを戦前に石井教導氏が写したものである。それを大戦後に熊原氏が筆写した写本が金沢文庫本である。現在、大崎・専修寺の原本は先の大戦で焼失してしまい、また石井教導氏の写本も戦後の混乱期に大正大学図書館から紛失し

まづて現存していない。従つて、金沢文庫の熊原氏の写本のみが現存している。なお、他の二種の写本より条文が三条ほど多く、記載内容も多少異なっているが、内容はほぼ前二種の写本と同様である。

『看病用心鈔』の内容を概略すると、基本的には宗教的な「臨終念仏」を唱えて、臨死者を浄土に送ることが目的になっている。そのために臨死者に阿弥陀仏の来迎を信じさせることが随所に示されているので、看病僧のための看取りの書物であると捉えることができる。そこには①看取る者に対する看病人の数、②看取るための適切な場所、③面会人の制限、④生への貪りや欲望を排除させること、⑤臨死者の観察方法、⑥臨死者に接する態度、⑦臨死者を往生させるための方法、⑧死への準備教育などの終末期医療に関する叡智が具体的に示されている。

五、『看病用心鈔』の内容

まず、前書きの冒頭では「敬知識看病の人に申上げ候。往生極楽ハこれ一大事の因縁なり。もし知識の慈悲勧誘のちからにあらすよりは この一大事を成就する事あらむや。これによりて 病者ハ知識にをきて仏の思いをなし 知識ハ病者にをきて 一子の慈悲をたるへしといへり」で始まっている。この文章は安土・浄厳院本の引用であるが、京都・常楽台寺本と内容は全く同じである。両者の相違は平仮名と片仮名の文字が異なっているだけである。しかし、横浜・金沢文庫本の「前書き」は「善導大師の曰はく、凡世の一大事ハ生死に過ぎたるハなし」と異なっている。シンボジウムでは浄厳院本と常楽台寺本を適宜使用して説明したが、ここでは安土・浄厳院本のみを資料として引用することにした。それは浄厳院本には全く欠落がなく、保存状態も極めて良好であるからである。作者の良忠上人は「前書き」で、看病僧と臨死者の關係は親子のような、仏と僧のような親密な關係が適切であると説き、両者の強い信頼關係の大切さを教えている。更に、「病にふさんはしめより 命のつきむおはりまで 御用心候へき事とをも しるし申しをき候」と述べて、病氣になつたら、まづ死のことまで考えて置くように用心しておきなさい。

次いで各条文について説明すると、まず、第一条では「一、先道場をかさり 本尊をむかへ奉て 仏の御手に五色の幡をつけて 病者の手にひかふへき様に……。仏と病者のあひたは すこしちかからんか よく候ぬへきなり。道場ハ

別の所にしつらひ わたすへし」と述べ、臨終の場所は普段使わない場所を選んで、仏像を安置しなさいと、説いている。

「一、酒肉五辛 このくさくけからハしき物くひたらん人をハ 病者のあたりに ゆめゆめよすへからす」と述べ、仏教で禁止している物を食べた人が臨死者に近づくこと、臨死者は狂い死にして三悪道に落ちると善導大師も教えている、と記している。また、現在では考えられないことであるが、「妻子なむとは ゆめゆめちかつけ給ふましく候」と説いている。それは自分の死後に妻子の悲しみ、家族の苦勞が偲ばれて、心安らかに浄土に往生できないから、会わせてはいけないと教えているようである。更に、「知識看病の両三人の外に 親も疎も 人をよせ給ふましく候」と述べ、臨終の場では三人の看病僧が最適である。もし、人数が多くなると騒がしくなり、臨死者が落ち着かなくなるので、良くないと説いている。

「二、目にたち 心ととめぬへき物をハ 病者のあたりに ゆめゆめこれを おくことなかれ」と述べ、臨死者に関心のあるものも置いてはいけない。「香をたき 花をちらして 常に病床をかさり給ふへし」。更に、「人の命のおはる事ハ 刹那のあひたなり。ゆめゆめ御目をはなつましく候」。また、「病のならひハ 夜ハかならず おもくなるものなり」と述べ、看病僧は臨死者からいつも目を離さず、特に夜中には気をつけなければならないことである。

第四条では、「一、知識三人よきほとと申したり。一人ハ枕にゐて 鐘をうちて念仏をすすめ 一人ハはしにゐて 雑事をいひつきへし。・又知識一人ハ常に病者のまなこの気色 いきの出てに目をはなたす 念仏の声ハ高からず ひきからず 病者のみにきこゆるほとなり」と示し、先に述べたように三人の看病僧の具体的な内容について語られている。また、念仏の声も高からず低くからずがよいと述べ、臨死者のことを配慮していることが窺える。

第五番目の条文では、「療治灸治の事ハ これ命をのふる事ならず。たた病苦をのそくハかり也」と述べ、医療は延命ではなく、苦痛の除去にあると述べ、現代医療のターミナルケアの目的と一致している。現代でも昭和時代までは、むしろ延命医療が専らであった。最近になって苦痛の除去がターミナルケアの目的になっているが、この考え方が鎌倉時代にもあったことに驚かされる。「往生のさハリには 生をむさほり 死をおそるるを 見なもととす。……これらの進退ハ 善導和尚 臨終要訣をもて よくよく御心えあるへく候」と述べ、生に執着するより必ず誰に

でも死が訪れるから、死への準備が必要であるとも説いている。

次に、人の死に方は様々であることを「衆生の業因まちまちにして 死縁一にあらす」と述べ、看病僧は念仏往生を臨死者に説くべしと教えている。それは「慈悲加祐の護念力によりて 正念往生疑へからす」と述べ、臨死者に「た一すちに來迎をまつ心地にすすめなさせ給へく候」と教えている。

「病者、食物をねかひとめて、まめやかに執念をもとめ」ているので、「臨終病床にのそむてハ、殊更二仏の制止給へる事也」と臨死者に説いて聞かせ、欲心を起させないようにすべきである。また、臨死者に「何か食べたいものがあるか」とか、「遺言があるか」も聞いてもいけない。それは臨死者の「心のみたるる故なり」として戒めている。

「二、死後の事ハ兼ねてしるしおきて候へハ」と、最期の臨終においても臨死者が「念仏往生こそたいせつに候へ」と分かるものである。それは「ひとへに欣求のおもひに住し、來迎をのそむ心に、住せしめんかためなり」と説いている。

大小便や吐瀉は屏風や障子で隔てた場所でさせ、病人が可能ならば「おきてしつへく」させ、重病になつたら寝たまま大小便をさせてもよいと、「くるしくハたた臥しなからせよ」と述べている。更に、次の条でも、不浄の大小便について述べ、本来仏前から離れた場所を選んで用を足させるようにして、臨終近くになつたら、臨死者には「常に紙を水にそめて喉をうるほして、念仏をすすめ給へく候」と結んでいる。

次に、看病僧は「大慈悲をおこして こしらへさせ給へ」と大慈大悲をもつて臨死者に極樂浄土を説き、臨終の際には「ヒトをうらみ 人をいかる事ハ 生涯のあひた なおし是をいましむへし。穢土をいとひ 浄土をねかふ心をいよいよすすめ給ひて 仏のちかひをたのみ 名号を唱へ給ふへし」と穢土を厭いて浄土を願う心を励ますようにさせなさい。更に、看病僧は臨死者が怒つても決して恨んではいけない、と戒めている。

また、看病僧は臨死者の夢を聞き、「罪の相ならは懺悔させ、念仏して罪を滅すへし。善の相ならは いよいよすすめはけませ候給へし」と説き、臨死者も看病僧もその夢を聞いても「ゆめゆめこれを人に知らせ給へからす」と臨死者の秘密保持を遵守させている。

「二、聞法ハ常に臨終講式と往生要集の十樂とをよみきかせ給へく候。十樂の中にも ことに第二段を よませ給

へ」と述べ、臨死者が「臨命終の時 浄土に往生する事をえされ」と看病僧も浄土に至るように『往生要集』などを読み聞かせなさいと説いている。そして、浄土に往生できれば、無上の快樂が得られることも臨死者に説きなさい。「浄土に往生する事をえつれハ 無量の快樂を受け、見仏聞法 離苦解脫せしむ」ことができるからである。だから、「無常を念して一心に死をまつへし」。看病僧には「専ら阿弥陀仏をねんして心に相応し 声にたゆる事なかれ」と教えている。

「一、説法のおもむきハ すへて厭理穢土 欣求浄土の理 本願の引接 此時にあるへく候。……ゆめゆめ本望を失する事なかれ。返々 用心怠るへからず」と説き、説法の目的を日頃から決して忘れてはいけなさと教えている。臨終の際に注意すべきことは仏の慈悲による救いを期待することである。「我等ハふかくちかひをたの見て 来迎をまつ。……阿弥陀仏とおもひて称念をはけむへし。是を最要としてすすめ給へ」と述べて、臨終の際には看取る者も看取られる者も阿弥陀仏の来迎を信じることの重要さを説いている。

「一、もし業障により 苦痛にも責められて 物くるしくなり」し時は、念仏を高く唱えて、耳にあてて聞こえるように唱えることも大切である。「もし又苦痛きハまりて 失念にもおよひ かなはぬ候とも、たた耳に念仏 たかく申きかせ給ふへく候」と述べ、念仏を続けることの重要さを看病僧に説き、臨死者が浄土に往生できるように努めなさいと説いている。

「一、苦痛顛倒して 物にくるひ 失念無記にも成りて ちからおよはされハとて いまハかなハし」と思食てすてはつる事ハ ゆめゆめあるましく候」。苦痛で意識がなくなっても倒れても、臨死者を決して見はなしてはいけない。看病僧は「慈悲をもて救護し給ふへし」と述べ、看取りの最期として「断息のきさみを見おはる事にて候」と述べている。遂には「苦痛もなくなりて しぬる事の候」。

人間の生きざまには種々あるように死に方もいろいろである。「はやくなりておはるも候。又次第にゆるく成ておはるも候」とある。「生死をすつるおはり 菩提にいたるはしめ この一刹那に候」と死の瞬間を看取ることの重要性が示されている。

最後の十九条目では、命が尽きた臨死者は決して触ったり、動かしてはいけない。「最後の時はいささかの事もしつらひとなりて 心念みたれ候へきゆえなり」と述べ、動かしたら往生できないからと教えているようである。また、「心澄まし念仏を申させ給ひて 一二時の程もすこさせ給へ」と、命絶えた後でも一、二時間念仏を唱え静かにしておかなければならない。

「後書き」には、今までの条文は概略を示したので、看病僧は臨死者により生き方も死に方も様々であるように、臨死者によつてケース・バイ・ケースで対処しなさいと説いている。ここでは「御用心のために あらあら記シ申候。これを大概として その外の事ハ ときにのみ おりにしたかひて よきやうに御はからひ候へく候」と述べ、最期に「要をとりて 願くハほとけ とくむかへ給へと思ひて念仏せよ」と説いており、当時の仏教における死生観を知ることができる有用なターミナルケアの叡智である。

以上、然阿良忠上人が著したとされる『看病用心鈔』の詳細な内容である。

六、『看病用心鈔』の感想を含めてのまとめ

『看病用心鈔』はターミナルケアにおける看取る者と看取られる者の関係が具体的に述べられている。そこには、先人の叡智が示され、現在でも通用する知恵が満載されている。仏と僧の宗教的関係、親と子の肉親の関係が示され、最も絆の強い信頼関係こそが大切であると教えている。場所については花を飾り、香を焚き、清潔さの保持に努め、屏風などによる環境の整備が示めされている。また、看病僧の人数や面会人についての配慮も見られる。特に、最近では延命が批判されているように『看病用心鈔』では、医療とは延命より苦痛の緩和にあると説いている点も重要である。更に、臨死者への食べ物や遺言についても示している。しかし、現在と異なる点では、臨死者の最期には妻子や親族などの親しい人には合わせない方が良いと説いている。その理由は肉親などを臨死者に会わせると心が乱れ、極楽往生できないからと考えたのであろう。

以上のように『看病用心鈔』は、如何に臨死者を往生させるかを説いた仏教的なターミナルケアの指南書である。

そのために看取る者は宗教的な配慮である慈悲の心を顕現する必要がある。従って、看病僧は臨死者に対して仏の来迎を信じさせ、念仏称名を唱え、極楽往生させるように導くことが終末期医療の目的になっている。

鎌倉時代において武士は闘いにおける死や負傷は時の運と捉えていたようであるが、庶民は死を恐れ、死や病を忌嫌っていた。苦しい生活を強いられた庶民にとって極楽往生することが大きな目標になっていた。この時代は寺院に看取りの施設が多く設けられた時代でもあり、例えば、鎌倉の建長寺には「済苦院」、円覚寺には「延寿堂」、称名寺には「無常院」などが建立されている。

なお、この看取りの『看病用心鈔』は江戸時代の可円の『臨終用心』へと引き継がれ、江戸時代における看取りのモデルにもなり、念仏の大切さ、看取る者の心得に発展した。その意味でも、この『看病用心鈔』はターミナルケアにおける名著として時代を超えて現代の医療倫理観にも看取りの知恵を提供していると思う。

七、おわりに

孔子は「我未だ生を知らず、安んぞ死を知らん」と説いているが、我々にとって死は最も知りたい事態であるが、絶対に知ることができない事態であることも知っている。だからこそ死が不安なのである。そこで、私たちは死をタブー視して考えないようにしてきた。しかし、今や避けることができない事態であるならば、死の準備教育を真剣に前向きに考えようとする動きが起っている。その叡智として鎌倉時代の『看病用心鈔』は看取る者と看取られる者の叡智を展開しているために、現代のターミナルケアを考える契機にもなると思ったので、このシンポジウムで取り上げた次第である。